

論文

紙芝居制作を通した軽度難聴児と保護者の支援
—共につくるメッセージとしての絵とことば—豊田明子
山本聡子

1 研究の目的と方法

本研究の目的は、名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学幼児教育研究所が子育て支援事業として実施した「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」を題材に、その取り組みの過程で得た知見や考察をまとめ、この取り組みを本学のカリキュラムの中核をなす「多文化共生保育」に繋げていけるよう、異なる感じ方・考え方をもつ人々と共に、対話の中で試行錯誤を繰り返しながら紙芝居を制作することの可能性を探ろうとするものである。

このプロジェクトの概要は後述するが、とくに本論文では、紙芝居の制作を進めていく際に表出した依頼者およびその家族の思いや、多様な専門性をもつ教員らが制作の過程で得た学びに焦点化する。紙芝居制作を「目的」として捉えてその完成を目指しながら、紙芝居制作をコミュニケーションの「手段」としても捉えたのがこのプロジェクトの独自性である。今後、子育て支援活動の一形式として紙芝居制作に取り組むときに配慮すべき事項について、このプロジェクトから得られた気づきをもとに初歩的な考察をしてみたい。

2 「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」について

2.1 「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」と幼児教育研究所における紙芝居関連事業との繋がり

このプロジェクトが立ち上がったきっかけは2月半ばのある日、小学校入学をひかえた軽度難聴児の母親からかかってきた一本の電話である。彼女は「手作り紙芝居」でインターネット検索をして、本学が紙芝居関連の活動に力を入れていることを知ったという。電話を受けた事務職員が聞いた依頼の内容は「子どもの小学校入学時に聴覚障害を紹介する紙芝居を作りたいので、作画してほしい。脚本は自分で考えるし、色は自分で塗るから、3月中旬までに絵だけを描いてほしい」ということだった。

たしかに本学幼児教育研究所では、紙芝居に関する活動として、「手作りキッズ紙芝居コンテスト」の主催、親子で紙芝居をつくるワークショップの実施等、様々なことに取り組んできた。名古屋市環境局からの依頼でプラスチックゴミの削減¹や食品ロスの予防²といったテーマで「環境紙芝居」を学生と共に作成したこともある。ただし「個人からの依頼で紙芝居を制作する」という業務は担ったことがないため、依頼電話を受けた翌日に本研究所として我々のできることやすべきことを話合った。そして、この日の結論は、我々がすべきは「紙芝居の制作」ではなく「相応の機関に繋ぐこと」であり、依頼者の紙芝居制作を手伝ってくれる機関や既製の難聴理解を促す紙芝居や絵本等について調べて「情報提供」をすることだろう、ということだった。

しかしこの話し合いの後、改めて依頼電話の状況を整理し、①依頼者がネット検索をして本研究所に辿り着いて電話をかけてきたこと、②制作にかけられる期間が1か月程度であること、③依頼者は紙芝居の絵と脚本を一体の作品として捉えていないことを考え合わせると、「情報提供」だけで済むと判断するのは、あまりにも非情に感じられたため、制作と連絡の主業務を研究所委員である豊田（本稿著者）が担い、本研究所の業務である「子育て支援・子育て相談」としてこの依頼を受諾したい旨を、翌週に予定されていた幼児教育研究所委員会の月例会議上で提案することにした。

その月例会議では、本研究所の関わりとしては情報提供だけで十分であるという意見や、ここで紙芝居制作に着手したら来年度以降の通常業務に支障が出るかもしれないという懸念等も挙げられたが、①紙芝居に込めたいメッセージについて丁寧な聴き取りが必要であり、その関わりは親子間の関係支援に繋がること、つまり、それは本研究所の掲げる「子育て支援・子育て相談」であること、②未来に対する不安を、今、目の前で困っている人の手を握らない理由にはできないこと、③研究所委員だけでなく、児童文化や保育内容の領域ことばの授業担当者である本学教員（本稿著者の山本）、紙芝居作家として活躍しているイラストレーター・照喜名隆充氏等の協力が得られるので作品や保育教材としての質が相応に担保できると見込まれること、の3点によって本学教職員5名からなる幼児教育研究所委員（2020年度）の同意を得ることができた。こうして、一本の電話相談をきっかけに、本研究所の「子育て支援・子育て相談」業務として、依頼者とその子どもと共に紙芝居をつくる「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」（以下、プロジェクト）は立ち上がった。

2.2 プロジェクトの概要

このプロジェクトの概要をまとめると【表1】のようになる。

【表1 プロジェクト概要】

名称	軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト
期間	2021年2月から4月
目的	1) 子育て支援としての手作り紙芝居の可能性を探ること 2) 子どもたちの人間関係支援・障害理解紙芝居を制作すること
内容	① 子育て相談 ② 紙芝居（絵と脚本）制作 ③ 紙芝居の実演と振り返り
連絡手段	①については母親との電話・メール ②、③については父親・母親とメール・質問紙

プロジェクト名は「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」とした。この「軽度難聴児」とは「軽度難聴児『一般』」の話ではなく、あくまでも本件の対象児（以下、A児とする）の現状から出発したものである。A児とその家族が入学時にクラスメイトやその保護者に伝えたいことに焦点化して紙芝居を制作した。また、難聴児「理解」ではなく「支援」としたのは、難聴者（あるいは難聴という状態）のことを聴者が「理解する」という関係、つまり、難聴者／難聴が目的になるようなイメージ、で捉えるのではなく、難聴者・聴者の別なく子どもたちが仲間になっていけるような「支

援」をしたいという願いをこめたことに起因する。このプロジェクト名を呼ぶたびに、支えることと援けることの重要性を改めて自覚できたと思う。

なお「軽度難聴」とは、日本聴覚医学会難聴対策委員会によれば「25dB 以上 40dB 未満の聴力レベル」で、小さな声や騒音下での会話に難しさを感じる状態だという³。この軽度難聴の場合、国立特殊教育総合研究所による難聴児支援に関する研究報告書においては、「子どもたちのほとんどは、きいて話すコミュニケーションを行って」おり、「きこえないわけではなく話せないわけでもないが、「それでもやはり健聴の子どもたちとちがうところがあると考えた方がよい」とされ、集団生活を送る上での難しさは主として「きこえが不安定なことからくるコミュニケーションの不安定さ」と「他人と同じようであることからくる自己意識の形成にかかわる課題」の2点として指摘されている⁴。そして、この難しさとともに生活をしていくためには「きこえやコミュニケーションについて本人や周りの人が知ることがとても大切」⁵であり、この紙芝居および紙芝居制作の過程が、自分自身あるいはお互いのことを「知る」ための一歩を励ますものになるよう強く願いながら、このプロジェクトは遂行された。

期間は、電話での依頼があった2月半ばをスタートとし、実演後の質問紙調査の用紙が返送された4月末をもってプロジェクト終了とした。子育てにもその悩みにも「終了」はないが、プロジェクトとしての「ゴール」を明確にし、時間を区切ることは達成感を得るためにも重要である。この経験が今後、他の困難に直面したときの糧になることを伝えたくてプロジェクトを閉じた。

プロジェクトの目的は大きく二つ、1) 子育て支援としての手作り紙芝居の可能性を探ること、2) 子どもたちの人間関係支援・障害理解紙芝居を制作すること、である。このプロジェクトが保護者の「子育て支援」として位置づけてスタートしたことについては既述の通りだが、この個別の経験のどの部分が本質的であり普遍化できるのかという問いを、チームメンバーは常に意識して本件に関わることを確認し合った。また、2) には「子どもたち」とあるが、それはA児の人間関係を考えるとき、A児だけを支援すればよいのではなく、A児を含む「子どもたち」の一人ひとりの存在を慈しむ気持ちを中核に据えたいという想いが込められている。「制作」つまり「紙芝居を完成させること」を目的とはするが、その先に、紙芝居を子どもたちがともに楽しむことを通して、聴こえの違いを超えた思いやりのあるコミュニケーションがうまれることを期待している。

プロジェクトの内容は、①子育て相談、②紙芝居（絵と脚本）制作、③紙芝居の実演と振り返り、の三つのフェーズで計画された。①はプロジェクトの全期間を通して継続的に行われ、①と②、①と③は併行して進められた。ただし、この第三フェーズについては別稿で論じることとし、今回は取り上げない。

意思疎通の方法は主として母親とのメールである。ただし、初回と最終回、および、文字だけでは感情やニュアンスを伝えきれない／掴みきれないと思われたときには、電話を使ってお互いの気持ちや理解の状態を確認しあった。A児の思いや聴こえの状況や家族の思いについては、母親を通して把握したが、これは必要な情報を得るためであるというより、母親が自分で「子どもや父親、祖父母らにもそれぞれに思いや考えがあること」に気づき、「対話の中でお互いの理解をさらに深めていくこと」を狙ったものである。

なお、本プロジェクトは、本学幼児教育研究所の事業として実施し、個人情報等を伏せた形で事業内容を公表すること、作成した紙芝居の著作権は本学にあり、授業や講習会等で使用すること等を

書面にて確認し、依頼者の承諾を得ている。

2.3 既存の軽・中等度聴覚障害児の支援教材・教具と本プロジェクトの目的の違い

そもそこのプロジェクトは、A 児の通所している聴覚に特化した療育センターが、A 児の母親に対して「A 児の聴こえの状態をクラスメイトに紹介するための紙芝居を作成した方がよい」と伝え、その提案に困った A 児の母親から電話がかかってきたことが発端だったということは先に述べたとおりである。彼女によると、当該療育センターにも聴覚障害理解に資する紙芝居は所蔵されているが、その発行年は古く、A 児の状況を適切に表現したものではなかったという。また彼女にとって「魅力にかける」ものであり、「そのまま使うことはできない」と思われたため、本学に助けを求めたのだった。

子どもの聴覚障害の支援や理解のための教材には、かるたや絵本、親の会や行政の作成するパンフレット等があり、紙芝居も市販されている⁶。しかし A 児のケースのように、聴覚の状態（聴こえやすい／聴こえにくい音の強さ・高さ・音色）は個性性が高く、既存の教材ではしっくりこないことがある。また、聴こえの状態は成長につれて変わる可能性があるので、本人あるいは本人の周囲が、聴こえの現状を「伝える手段」をもつこと、そして「伝えたいと思える関係」を築いておくことが望ましいだろう。

なお、既存の紙芝居を見つけれなかったのは、紙芝居に対する需要がないことにも起因する。例えば、国立特殊教育総合研究所（聴覚・言語障害教育研究部門）の軽・中等度難聴児に対する指導と支援、あるいは、聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業に関する研究報告書⁷には、子どもたちが実体験を通して聴こえの違いに気付いていく事例が多数掲載されているが、紙芝居を聴こえの状態を知らせる手段として使っている事例はない。このことは年度末に実施された A 児の小学校入学前の相談の際に小学校側からも指摘されていることである。最近では、聴覚障害理解を深めるために、「紙芝居の上演」で知識を伝えるような啓発的な活動ではなく、クラス内での対話やさまざまな器具を用いた体験を通して互いの聴こえ方の違いを理解し合う、という手法をとることが多いという。

こういった状況下にあって、「A 児の聴こえの状況を伝える紙芝居」を「作成すること」、そして入学式当日、あるいは入学式直後に、それをクラスメイトやその保護者の前で「上演すること」にどういう意味があって、どういう結果をもたらすのかということを想像しながら、制作メンバー同士の学び合いと気づき合いの中でこのプロジェクトは深化していくこととなった。

とくに重要だと思われたことは、療育センター職員の勧めで、ある意味、受動的に紙芝居制作をスタートさせた依頼者の「作らないという選択肢は選べない」「完成したら演じなくてはならない」という固定観念を解きほぐすことだったように思う。我々は、依頼者が実際の紙芝居制作を通して、我々と、また、子どもや家族、そして自分自身と対話を重ねていくうちに、プロジェクトの目的の再設定も可能だということ、つまり「作成を途中でやめる」という選択肢や「作成してもクラスメイトの前では上演しない」等の選択肢もあり得るということ、つまり、自分が伝えたいこととその手段やタイミングは自分が対話の中で決めていくことなのだ、と思えるようになってほしいと願っていた。

したがって、依頼者である母親自身の伝えたいことを探りながら、ただし、それは子どもの望ん

でいることなのかはわからないため、彼女が子どもと対話を重ねていくよう促し、対話の中でお互いがお互いの思いに気付いていけるような問いを投げかけ、フィードバックをすることに力を注いだ。そして「療育センター職員に言われたから」ではなく、「自分と子どもが、クラスメイトに伝えたいメッセージをのせた紙芝居をつくり、上演するということを決めたのだ」という実感がうまれるようなサポートを心掛けた。

もちろん、本プロジェクトでも既存の教材と同様に「紙芝居の上演によって聴覚障害理解を促す」ことを目指すには違いないが、この制作の過程が演じ手側の意識を変容させ、主体性を引き出し、観客をいきいきとイメージしたうえで、何を、どう伝えたいのか、というメッセージを明確にしていける点に、既製の教材を用いるのとは異なる独自性と重要性を見出すことができる。

3 制作した紙芝居について

3.1 脚本

3.1.1 脚本作成の基本方針

脚本担当者である山本は本学講師であり、短大保育科の「児童文化」、短大保育科と四大こども学部こども学科の「保育内容指導法言葉」の授業を担当し、その中で紙芝居製作や紙芝居実演についての指導を行っている。以前に幼児教育研究所委員会の委員だったこともあり、手作りキッズ紙芝居コンクール運営や応募作品の選定等に関わった経験をもつ。また、名古屋市環境局の依頼による「環境紙芝居」の監修、作成を行っている。

脚本担当者が最初に受け取った脚本（【表2】、脚本案①）は、企画・作画担当者（豊田）が作成した原案を受けて、依頼者（A児の母親）が我が子のプロフィールや配慮をしてほしいと思っていることなどを盛り込んで作成されたものである。なお、原案は「難聴の子を持つ家族会『そらいろ』」による『～知ってくれとうれしいな！～難聴（なんちょう）の8つの話』⁸を参考にした。

脚本づくりは、母親の目的（小学校に入学するA児の聴覚障害について、クラスメイトとなる新生児に伝え、理解を促すと同時に、A児への関わり方のうちで配慮を要する点を紹介する）を踏まえ、まず叩き台として、年長児が理解できる程度の文章の長さと言ひ回しを目指してスタートした。「年長児が理解できる程度」としたのは、小学校での実演を想定してはいるが、少し易しめにした方が良いと判断したためである。予定している実演時期が入学直後の落ち着かない時期であり、どの子どもにとっても環境の変化に戸惑う時期でもあると考え、実際の実演対象年齢よりやや易しい表現と内容を目指すこととした。

作成した脚本案は、依頼者親子からの意見や、幼児教育研究所委員の教員からのコメントを受けて、紙芝居制作チーム（本稿執筆者の二名）で検討して修正を加えていった。

3.1.2 二種類（子ども向け・大人向け）を作成した理由とそれぞれの特徴

脚本案①の時点では「本人が実演する」ことのみを想定していたが、紙芝居制作チームによる話し合いの中で、A児本人（子ども）が主にクラスメイトを対象に実演する「子ども向け」と、大人が教職員や保護者たち、高学年の児童などを対象に実演する「大人向け」を分けて作成することに変更した。

その理由は依頼者が紙芝居の脚本に入れてほしいこととして提示してきた内容が、詳細で量的に

も多かったことにある。1年生の子どもが読むには文章量が多く、また、聞き手であるクラスメイトにとっても「お願いしたいこと」の情報量が多いと、かえって肝心の内容がぼやけて、伝えたいことが伝わらないのではないかと考えた。そのため、紙芝居を用いてクラスメイトに伝えることとして「お願い」項目の中でも最優先事項を考えて「補聴器が大切なものである」、「ゆっくり、はっきり話してほしい」、「呼ぶときは肩を叩いて知らせしてほしい」の3点に絞り、4枚構成の脚本を「子ども向け」として作成することにした。その一方で、脚本案①の内容の中には「周りの大人や、低学年を見守る立場になりうる高学年の児童には知っていてほしい内容」が含まれており、それを生かすため「子ども向け」の4枚に、さらに2枚（「A児の聴こえの特性」と「サ行とタ行の単語などの混同しやすい言葉」）を加えた6枚構成の脚本を「大人向け」として作成することが良いと考え、2作品に分けることにした。

また、脚本案①には含まれているが、我々の提案によって削った内容もあった。一つ目は、本人の自己紹介的な部分である。これは、新入学の時期の自己紹介として、内容に含まれていてもおかしくはないものではあるが、周囲の子ども全員が入学したてであり、自分のことを知ってほしい時期であることを考えると、本児だけが紙芝居で自己紹介をするのは相応しくないと考えたことと、読み上げる文章量を少なめにしたいという観点から、適宜内容を整理した。

続いて、脚本案①にあった「混同しやすい言葉」の項目も「子ども向け」からは削除した。これは、A児が聞いたときに混同しやすい言葉は発音しにくい言葉でもあると考えられ、「混同しやすい言葉」の項目を紙芝居に含めた場合、A児自身がこの紙芝居を演じる際に、余計な緊張を強いることに繋がると考えたためである。

【表2 脚本案①と完成版の比較】

場面	脚本案①（依頼者提案）	完成版（大人向け）	完成版（子ども向け）
タイトル 画面 A児と補聴器の絵	<p>①自己紹介（じこしょうかい）</p> <p>ぼくの名前は（A児の名前）。好きな食べ物はお肉！おにぎり！レタスのサラダ！</p> <p>身体を動かす遊びは大好き！ドッジボールがブームだけど、自転車やダンスなど他にもたくさん！</p> <p>お部屋では、よくお絵かきしてるよ！あとで、みんなの好きなもの、教えてね！</p> <p>あのね、ぼく、お友達と一緒に遊ぶのが大好きなんだ</p> <p>ちょっと伝えたいことがあるんだ。それはぼくの耳のこと。</p> <p>②補聴器（ほちょうき）</p> <p>ぼくの耳は小さい音が聴こえにくいんだよ。音がゆがんで、聴きづらい（原文ママ）言葉もあるみたい。</p>	<p>①</p> <p>今日は、みんなに知ってほしいことがあるんだ。</p> <p>それはぼくの耳のこと。音がゆがんで、聴きづらい言葉があるみたい。</p> <p>耳に付けているこの小さな機械は「補聴器」っていうんだけど、これがぼくの耳の働きを助けてくれているんだよ。</p> <p>この機械はとっても大事。落としたり、水が掛かったりしないように気を付けているよ。</p> <p>ぼくはみんなとお話するのが大好き！ いっぱいしゃべりかけてね。でもね、（半分抜く）</p> <p>後ろから名前を呼ばれただけだと、呼ばれていることに気付</p>	<p>①</p> <p>ぼくは、ほちょうきをつけています。</p> <p>こういう、みみにいれる、ちいさなきかいです。</p> <p>メガネをかけるとよくみえるみたいに、</p> <p>ぼくもほちょうきをつけると、おとがよくきこえます。</p> <p>でも、ほちょうきをつけているときでも、</p> <p>みんなにてつだってほしいことがふたつあります。</p> <p>ひとつめは、ぼくをよぶときのことです。</p> <p>（はんぶんぬく）</p> <p>うしろからなまえをよばれただけではきづけないこともあるから、</p>

	<p>耳に付けているこの小さな機械は「補聴器」っていうんだけど、これがぼくの耳の働きを助けてくれているんだよ。目にめがねのような感じだけど、聴こえ方は本当の耳にはかなわないんだって。</p> <p>この機械はみんなの耳と同じでとっても大事。落としたり、水が掛かったりしないように気を付けているよ。</p>	<p>ないこともあるよ。</p> <p>だから、ぼくを呼ぶ時は、 (全部抜く)</p>	(ぬく)
<p>左半分： マスクの こども</p> <p>右半分： 口を大きく 開けている 子ども</p>	<p>③こんなふうに話してほしい</p> <p>ぼくはみんなとお話するのが大好き！</p> <p>補聴器のおかげでいくらか聴きやすくなってるから、2人でお話するときには話しやすいんだけど、みんながいつせいに話したり、ざわざわした場所では、たくさんの音や声が混ざって補聴器で大きくなってしまいうから、分からなくなってしまう。</p> <p>マスクで口が隠れていると、口の動きが見えないから、余計に分からなくなるんだけど、ぼくの目を見て、ちょっとゆっくりめにはっきりと話してくれると助かるよ。</p>	<p>②</p> <p>軽く肩をトントンって合図して、ぼくが気づいたのを確認してね。</p> <p>あと、もし誰かが遠くから呼んでるのにぼくが気づいていなかったら、近くのお友達が肩トントンで教えてくれると嬉しいな。</p> <p>みんなにお願いしたいことがもう一つ。</p> <p>(半分抜く)</p> <p>おしゃべりするときのことなんだけど、マスクをしていると、口の形がよく見えなくて、何をしゃべっているのが分かりにくいんだ。だからね、 (全部抜く)</p>	<p>②</p> <p>ぼくにわかるように、「かたをトントン」して、あいずをしてほしいです。</p> <p>ふたつめは、いっしょにおしゃべりをするときのことで、 (はんぶんぬく)</p> <p>マスクをしていると、くちのかたがみえないから、こえもちいさくきこえます。だから、ぼくとはなしをするときは、 (ぜんぶんぬく)</p>
<p>左半分： 合図されて 振り向く 子ども</p> <p>右半分： 肩をトントン する手</p>	<p>④肩トントンで呼んでね</p> <p>ぼくに話しかけるときは、軽く肩をトントンって合図して、ぼくが気づいたのを確認してね。</p> <p>遠くから名前を呼ばれても、聴こえないときがあるんだけど、無視してるんじゃないからどんどん声掛けてね。近くにいて聴こえたお友達は、ぼくの肩を軽くトントンして教えてね。</p>	<p>③</p> <p>一緒におしゃべりするときには、「ゆっくり」「はっきり話してくれると嬉しいな。</p> <p>(抜く)</p>	<p>③</p> <p>ゆっくりははっきり、はなしてほしいです。</p> <p>そうしてくれたら、くちのかたがみえなくても、おはなしがよくわかります。 (ぬく)</p>
<p>聞き取り にくい・ 困る状況 のイラスト</p>	<p>⑤こんな音が聴こえにくい、気づいてないときは教えてね</p> <p>ぼくは何が聴こえてないのか、実はまだよく分からないんだけど、補聴器つけてると、目の前でえんぴつが落ちた音とかある程度は聴こえるよ。砂場を歩く音や、走っている音は聴こえるけど、部屋を靴下で歩く音は聴こえない。バイクの大きな音は聴こえるけど、自転車の音は聴こえにくい</p>	<p>④</p> <p>それからね、補聴器には得意な音と苦手な音があるんだ。</p> <p>小さな音でも聞こえるのはね、物が立てる音。</p> <p>たとえば、目の前で鉛筆が落ちた音。砂場を歩く音や走る音。</p> <p>でも、補聴器が苦手な音もあるよ。たとえば、人の話し声。</p>	<p>*</p> <p>「子ども向け」では削除</p>

	<p>ね。 話しの内容が聴き取れていない事も多いから、みんなが何かに楽しく笑ってるときには、ほくにもちょっと教えてよ！</p>	<p>たとえば、人の話し声。 みんなでおしゃべりしているときに、みんなが話していることが聴き取れていないときもあるよ。 だから、みんなが何かに楽しく笑ってるときには、ほくにもちょっと教えてほしいな！</p> <p>それから、聞き間違えやすい音があるんだよ。たとえばね、 「さしすせそ」と「たちつてと」って、よく似てる。 (半分抜く) 「サイ」と「鯛」って、「どっちかな？」って思っちゃう。 (全部抜く)</p>	
<p>混同しやすいもの (サイとタイ、寿司と土)の絵</p>	<p>⑥聴き間違えやすい言葉 サイとたい、そらとトラ、しかくとちかく、すきとつき、すしとつち たんじろうとかんじろう。 色々似たような言葉あるよね。 文字や絵を見ながらだとか、物まね(ジェスチャー)と一緒にだと分かりやすいよね。</p>	<p>⑤ 「すし」と「つち」、これもよく似てる！ ほかにも、似てる言葉っていっぱいあるね。 そういう言葉は、自分で言うのも難しいから、練習中だよ。 (抜く)</p>	<p>* 「子ども向け」では削除</p>
	<p>⑦まとめ 「補聴器大事、ゆっくりはっきり肩トントン、あれっ？と思ったら教えてね！」 実はほくも自分の聴こえ方が、みんなとどう違って、どう一緒なのか、よく分かってないんだけど、みんなと遊びたい気持ちでいっぱいだよ。 どうぞよろしくね！</p>	<p>⑥ 実はほくも、自分の聴こえ方が、みんなとどう違って、どう一緒なのか、まだまだよく分かってないんだ。 分かったことがあったら、またお知らせするよ。 「ゆっくりはっきり、肩トントン」でいっぱいおはなしして、いっぱい遊ぼうね！</p>	<p>④ ほくは、みんなとともだちになって、いっぱいおしゃべりしたいです。 だから、ほくからみんなへ、ふたつのおねがい。 「ゆっくりはっきり、かたトントン」 どうぞよろしくね！</p>

3.1.3 脚本作成上の配慮

脚本を作成する上で配慮した点について述べる。

一つ目に、先にも述べたとおり、特に「子ども向け」では年長児でも読み上げることができ、聞いて理解できる文章量と言い回しとなるように作成した。

二つ目に、脚本案①には入っていたA児の個人名を抜いた表現とした。こうすることで、個人情報保護され、汎用性も備えられた。

三つ目に、情報の順序を整理した。脚本案①では、「こんなふうに話してほしい」が3場面目、「肩トントンで呼んでね」が4場面目の内容として書かれていたが、子どもの生活する姿をイメージし、

関わりの流れとしてより自然な「呼んで」、「話す」となるよう、順序を入れ替えた。

四つ目に、「できない」、「聞こえない」など、ネガティブなイメージを喚起する言葉を使わないようにした。不用意なからかいが生じないようにということと、周りの子どもにとって「出来ないことのある子ども」ではなく「そういうところもある友だち」として否定的な先入観を持たずに仲間関係構築のスタートを切ってほしいという願いからである（【表3】参照）。

これらの配慮点に関する考え方は、丁寧に説明をして同意を得て脚本案に修正を加えた。実演後に返送された質問紙調査の記述をみると、この変更箇所についてのやりとりを通して、依頼者のことばに対する感覚が磨かれ、子どもの人間関係を考えるための視野を広げることに繋がったことが窺われるが、その点への考察は別稿で論じたい。

【表3 ネガティブな言葉の言い換え例】

脚本案①での表現	完成版の表現
（子ども向け）ほくの耳は小さい音が聴こえにくいんだよ。	（削除）
（子ども向け）マスクで口が隠れていると、口の動きが見えないから、余計に分からなくなるんだけど、（後略）	マスクをしていると、くちのかたちがみえないから、こえもちいさくきこえます。
（大人向け）マスクで口が隠れていると、口の動きが見えないから、余計に分からなくなるんだけど、（後略）	おしゃべりするときのことなんだけど、マスクをしていると、口の形がよく見えなくて、何をしゃべっているのかが分かりにくいんだ。だからね、（後略）
（大人向け）ほくは何が聴こえてないのか、実はまだよく分からないんだけど、補聴器つけてると、目の前でえんぴつが落ちた音とかある程度は聴こえるよ。砂場を歩く音や、走っている音は聴こえるけど、部屋を靴下で歩く音は聴こえない。	それからね、補聴器には得意な音と苦手な音があるんだ。 小さな音でも聞こえるのはね、物が立てる音。たとえば、目の前で鉛筆が落ちた音。砂場を歩く音や走る音。

3.2 紙芝居のメディア特性を生かした工夫

上記の表現上の配慮に加え、「紙芝居」というメディアならではの技法として、以下の三つの工夫をした。

一つ目は、「途中で抜く」を効果的に用いたことである。半分抜いて情報を順次見せる構成にしたことで、1枚の絵でも2枚分の効果を持たせることができた（【表4】参照）。

【表4 「途中で抜く」技法の活用例】

	<p>1 場面目</p>
	<p>1 場面目を途中まで抜いたところ</p> <p>紙芝居舞台に囲まれた部分の絵では、2 場面目の手が見えて、1 場面目の子どもの肩をトントン叩いているように見えている。</p>
	<p>1 場面目を全て抜いたところ</p> <p>2 場面目では、肩をトントンと叩いて呼ばれた子どもが振り向いている。</p>

二つ目に、実演の際の助けとなるように、「演出」を加えたことである。身振りのヒントや他の演技方（演技手の名前で読み替えるなど）を入れることで、状況に応じた実演となるよう、また観客に伝わりやすいようになると考えられる（【図1】参照）。



【図1 裏面の例（子ども向け 1枚目）】

この実演については、自由に考えていきいきと演じてほしいという思いと、これだけは心に留めておいてほしいという作者としての思いがあったので、「子ども向け」、「大人向け」の紙芝居裏面の1場面目それぞれに作者からのメッセージを「作者のことば」として記載した。作者の思いが、実演者の自由を制限するのではなく、明るい未来へのエールになるように願って載せたことばである。

【紙芝居裏面1枚目に記載した作者のことば】

<子ども向け>

この紙芝居は、小学校に入学したての1年生に、補聴器をつけたお友達のことでもっとも伝えたいことは何かな？それはどうしたら伝わるかな？と考えて作りました。（もっとももっと伝えたいことはありますが、それは一緒に生活するうちにきっとだんだんわかり合っていくものです。だから大丈夫！）

自分のことで精一杯のときに、お友達を思いやるのはとても難しいことです。でも、仲間が困っていたら、自然と手を差し伸べたくなるものなのでしょう。そんなときに「自分がどんなふうに手伝えるのか」を知っていることは重要です。

どうかお互いのことを少しずつ思いやれる優しいコミュニティが「あたりまえ」にできていきますように。その最初の一步に寄り添えることをとても喜んでいます。

（豊田 明子）

＜大人向け＞

小学校に入学した時のこと、みなさんは覚えていますか？ 新しい環境に対する不安と期待とでソワソワドキドキして、心も体もカチコチだったことでしょう。この紙芝居は補聴器をつけた子どもとその周りの子どもたちのことを、周りの大人はどんなふうにさりげなく手伝えるのか、を考えて作りました。

子どもたちはそれぞれに新しい環境に適応しようと頑張っています。気持ちのすれ違いやぶつかり合いは避けるべきことでも悪いことでもなく、むしろ「一緒に乗り越えていくこと」が大切なのですが、補聴器をめぐる状況を考えると「そこでぶつからなくてもいいよね」「知っていればすれ違わなかったのでは」という事態がありそうな気がします。

この紙芝居が、子どもたち一人ひとりに「ちょうどいい支援」とは何か（私たち大人ができること・すべきこと、できないこと・しないほうがいいことは何か）、を考えるきっかけになりますように。

（豊田 明子）

三つ目に、外箱を作成したことである。紙芝居は絵本と違い綴じられていないため、収納や保管の問題がある。入れるものによっては、中身が見えなくなったり、置き場所に困ったりして、忘れられ使われなくなってしまう恐れもある。そのため、市販の紙芝居と同じ箱に、同じように背表紙と表紙の印刷物（帯）を作成して貼り、図書館等の書架に既製の紙芝居と同様に並べて置けるようにした。

箱だけでなく、帯を貼付したことによって制作者の願いや作品の紹介を記載することもでき、紙芝居本文を読まなくてもこの作品の概要を容易に見られるようになった（【図2】および【紙芝居外箱の帯に記載した作者のことば】参照）。



【図2 紙箱への帯の貼付イメージ】

【紙芝居外箱の帯に記載した作者のことば】

ここには、4～6歳の子ども向けに演じることを想定した言葉遣いの【4場面】版と、そこに2場面追加してもう少し「聴こえの違い」に踏み込んだ【6場面】版を同封しています。

どちらの紙芝居も、補聴器をつけた子どもとその周りの子どもたちの気持ちを考え、どうしたらわたしたちは「さりげなく」手伝えるのか、を考えて作りました。

子どもたちは常に、新しい環境、新しい今に一生懸命です。気持ちのすれ違いやぶつかり合いは避けるべきことではなく、「一緒に乗り越えていくこと」こそが大切ですが、補聴器をめぐる状況を考えて「そこでぶつからなくてもいいかな」「知っていればすれ違わなかったのでは」という事態がありそうな気がします。

この紙芝居が「一人ひとりに寄り添うこと」や「ちょうどいい支援」を考えるきっかけになりますように。

3.3 作画・彩色の際の配慮

作画については、イラストレーターであり紙芝居の作画も手掛ける照喜名氏のご厚意を賜り、絵のサイズや情報量、彩色等に関して「伝える」ためのポイントをご教示いただき、豊田が担当した。

照喜名氏によると、紙芝居の絵は絵本の絵とは異なり「情報伝達の速さ」を必要とするため、絵本の絵と同じように絵画的に表現されているように見える絵であっても、紙芝居の絵の場合には見えない下地にピクトグラムのデザイン的な構成が不可欠であり、絵画としての絵の「良さ」と紙芝居として絵の「良さ」が必ずしも一致しないため、「いい絵だけれど見にくい」、「見やすい絵だけれど味気ない」ということにならないよう「ちょうどいい加減のバランス」が求められるのだという。そして紙芝居の絵で重要な「情報を素早く的確に伝える」ために、ハガキ大もしくはその半分程度のサイズで下絵を描き、その下絵を拡大したものを用いて作画すると小学校の教室の一番後ろの席からでもはっきりと見えるものになるとのことだった⁹。

そして子どもの認知発達を専門とする教員からは、制作時に年長児であるA児と想定される観客（初回の上演時には入学直後の6歳児）の認知発達の特徴を考えて、不必要な省略やデフォルメを避けて作画することが望ましいという指摘があり、それに従った。

なお、主人公の絵や画風は再三の路線変更があったことも付記しておきたい。プロジェクトが立ち上がった当初、依頼者は「なんでもいいから絵を描いてほしい」「絵だけでいい、色は塗らなくていい」というスタンスだったが、プロジェクトの半ばになると、A児の写真を添付したメールで「こういう髪型にしてほしい」「目を大きく描いてほしい」「子どもの好きな色は赤」等、さまざまな想いを伝えてくるようになった。こうした要求をもち、その気持ちを表出できるようになったことは、「自分はわからないから専門家の先生方にお任せする」という遠慮がちで受動的な関わりから、本プロジェクトのメンバーとしての関係性が深まったことの証左であると捉えられる。

作画担当としては、A児に似せて描く必要性を感じなかったが、A児が「自分の」という感覚と愛着をもつことに繋がり、さらに観客として想定される新一年生たちにとって、A児に似ている風貌のキャラクターを用いることが理解を助けるために効果的に働くかもしれないと思い直して、送付された写真を参考に、写実的に描くこととした。ただし何種類か描いて提案するうちに、

A 児と母親、父親の好みの差が表出されたため、子ども用と大人用で絵の種類・雰囲気を変えて、どちらの思いも尊重することとした。なお、本稿で示している画面は、A 児の写真を用いて描いた写実性の高い画風の紙芝居ではなく、本学での授業や講習会で使用するために新たに作画し直したものである。今後、保育者養成校でずっと使っていくことを考え、A 児に繋がる情報をカットし、A 児の成長後に気持ちの変化が起きてもわだかまりが生じないように、作成し直した。

また彩色の際には、色覚特性をもつ子どもにとっても視認性の高い色（彩度・明度）の組み合わせや、洋服に柄を加えることなどを試みた。参考にしたのは『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット ガイドブック 第2版』¹⁰である。

4 考察と今後の課題

本プロジェクトは、紙芝居文化という大きな枠組みと、子どもの認知発達の知識、障害児支援の様々な実践を背景に、対話の中から生まれたことばと絵を見つめ、見つめ直したときに、さらに生まれてくる考えや感情をことばと絵で表現し、伝え合うことを通して、自分たちそれぞれの思いに相応しい表現を探りつづける営みだったといえよう。

紙芝居は、演者の発したことばと絵が一体になることで、観客である多くの人々の間に理解と共感を生み出すメディアであり、本プロジェクトではその特性を存分に生かせるように配慮をして制作された。とくに脚本作成や作画の際には、想定される観客に最も伝えたいメッセージに焦点を当てることによってことばと絵を削ぎ落していったが、ここでの対話が多様な観客をいきいきとイメージすることに繋がった。具体的には、多様な認知発達の特徴をもつ子どもたちにとって集中力を保てる文章量や画面の抜き方の効果を検討したこと、また「見え方の特性（例えば色覚特性）」を考えて彩色の際に配慮したことが挙げられる。

制作の全過程において、幼児教育研究所委員の間、あるいは、脚本担当者・作画担当者・依頼者である母親のそれぞれの間、また依頼者の家族間や保護者と子どもとの間、等々、あらゆるところで異なる考え方や感じ方が顕在化したことは、次のような気づきに繋がった。それらが一見、相反するものであったり、対立のように感じられるものであったりした場合でも、丁寧に時間をかけて対話を重ねていくと、お互いの理解を深める端緒として捉え直せるものになるということである。それをプロジェクトに関わった者のそれぞれが実感を通して理解できたことは今後、別の紙芝居制作に携わる際に、行く道を照らす希望になるに違いない。

また、この紙芝居制作を通して、1) 時間を区切ることが生む駆動力と具体物のもつ力、2) 対話を促すツールとしての紙芝居制作の可能性、3) 漠然とした不安を絵とことばで表現することの意味や仲間とともに考えていくことの重要性、の3点に気付いたことを記しておきたい。

まず、1) 時間を区切ることが生む駆動力と具体物のもつ力について、このプロジェクトでは、完成の期限までの1か月間で紙芝居を作成することを目標に据え、紙芝居作成時の電話やメールによるやりとりを通して、保護者（今回はとくに母親）の気持ち・考えを整理することに努めたが、①ゴールの日時を定めて、小さなステップをいくつも刻んで、成果を積み上げていったこと、と②やりとりを具体的に示す絵とことばが共有されたこと、の効果は大きく、本稿では取り上げなかったが、これまでなかなか自分の意見を家庭内で主張してこなかったと推察される母親の選択や決断を励まし、母親自身をエンパワメントできたと思われる。

そして、2）対話を促すツールとしての紙芝居制作の可能性については次のことが言える。いくら大人と子どもの「共作」といっても、どうしても大人主導で進みがちな紙芝居制作になるのが常であるが、この紙芝居の場合、脚本を作成する際に、保護者だけでなく、子ども自身が自分の聴こえの現状を把握する必要があった。そのため、紙芝居制作チームでは、保護者が子どもをよく観察し、子どもに意見を求めて、子どもが紙芝居作成に積極的に関与できるよう保護者をサポートすることを心掛けた。その結果、子どもだけでなく、保護者である母親自身も意見を形成し、絵や色に対する要望を言葉にして伝えられるようになってきたのは興味深い変容だったと思う。最終的に完成した紙芝居の上演を迷いはじめた父親が、上演を断念するよう彼女を説いたときにも、けして首を縦にはふらなかったこと、父親が上演を子どもに問いかけたときに、子ども本人は上演することに迷いがなかったということを補足しておく。

最後に、3）漠然とした不安を絵と言葉で表現することの意味や仲間とともに考えていくことの重要性、としてまとめるとありきたりな結論に感じられるが、その内実の個別性と一回性は極めて高い。この紙芝居制作が進むことによって、保護者の抱いていた漠然とした不安や悩みが（紙芝居という）形を与えられ、形のない不安や悩みが「心の外」に目に見える形で取り出された結果、客観視できるようになり、検討対象として我々とともに共有できたのである。紙芝居制作を通して、クラスメイトや上級生とその保護者、教職員らに伝えたいメッセージを、A 児の母親自身が明確にしていくと同時に、紙芝居の最後の場面に描かれた明るい希望の色彩をもって小学校入学をイメージできたことは、大きな励みになったという。とくに、利害関係のない第三者であり、保育の専門性をもつチームがこの紙芝居制作にかかわったことによって、考える必要があることとそうでないことを峻別できたことの意義は大きいだろう。

5 おわりに

繰り返しになるが、本プロジェクトは、偶然に受けた一本の電話がきっかけとなり立ち上がったものである。チームのメンバーが少しずつ優しさをもちより、心を砕き、時間を割いたことがさらに多くの人の心を動かし、さまざまな専門性をもつ人の協力を得て、紙芝居という形として結実したといえよう。ひとりではどうしたらよいかわからないような困難な状況に陥ったときにも、絶望することなく小さな光をみつけて助けの声をあげれば、見ず知らずの人が助けてくれるくらいに世の中は優しいということ、わたしたちは、助ける人にも助けをもらう人にもなれるのだということが依頼者に伝わったらいいいし、いつか A 児にも伝わるといい。それが、この紙芝居にのせた大きなメッセージであり、この経験をいつか違う難局に立ったときの底力にしてほしいと思う。

注

- 1 2R 推進実行委員会企画「めざせ！食品ロスないないマン」（10 場面）、名古屋柳城短期大学幼児教育研究所監修、Kome・山本聡子共作・画、2018 年 3 月 23 日
- 2 容器・包装 3R 推進実行委員会企画「ウミガメおやこときれいなうみ」（10 場面）、名古屋柳城短期大学幼児教育研究所監修、青山詩奈・山本聡子共作・画、2016 年 3 月 25 日
- 3 日本聴覚医学会難聴対策委員会「難聴対策委員会報告－難聴（聴覚障害）の程度分類について－」、2014 年 7 月、p.6

- 4 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所による啓発冊子『軽度・中等度難聴児の指導・支援のために－軽度・中等度難聴児をはじめ担当される先生へ－』（特教研B－270）平成24年3月、p.7
- 5 同上、p.1
- 6 障害理解を目的とする紙芝居には『みんなでぼん！－手話ってすてきなことば』（まついのりこ脚本・絵、2012年）、聴覚障害をあつかった絵本には『ぼくのだいじなあおいふね』（ディック・ブルーナ絵、偕成社、1986年）、『わたし、耳がきこえないの』（写真・文トーマス・ベイリマン、偕成社、1987年）、等がある。また参考にしたサイトは、以下の通りである。
 - 1）難聴児支援教材研究会のホームページ <http://nanchosien.com/sitemap.html>
 - 2）全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 <http://www.zennangen.com/index.html>
 - 3）長野サマライズ・センター <https://www.nagasama.net//> の「里ミミ」プロジェクト
 - 4）「難聴の子を持つ家族会 そらいろ」 <https://sorairohukuok.jimdohree.com/>とくに、4）のHPにある「難聴を知るツール」と題するページに、自由にダウンロードして良いことが記されたPDF『難聴の8つの話（小学生向け）』と『難聴の8つのおはなし』（ミニ手帳）があったため、このPDFを参考に紙芝居の脚本原案を作成した（このことは本文3.1 脚本 で再度触れることとする）。（参照 2021年10月28日）
- 7 独立行政法人国立特殊教育総合研究所による難聴児支援に関する研究報告書の中で、本研究ではB-273『軽度・中等度難聴児に対する指導と支援の在り方に関する研究』（研究代表者原田公人、2012年3月）や「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業（平成12年度～平成14年度）」（聴覚・言語障害教育研究部難聴教育研究室、2003年3月）を参考にした。
- 8 脚注6の4）参照のこと
- 9 この部分は照喜名氏に作画担当の豊田が2021年2月末から3月のはじめに数回にわたって、ご指導いただいた内容を記述したものである。まとめ方の文責は全て豊田にある。
- 10 カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット制作委員会『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット ガイドブック』第2版、2018年

Supporting a Child with Moderate Hearing Impairment and His Parents Through Kamishibai Production

Toyoda, Akiko* Yamamoto, Satoko*

本稿は、名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学幼児教育研究所が子育て支援事業として実施した「軽度難聴児支援紙芝居プロジェクト」を題材に、その取り組みの過程で得た知見や考察をまとめたものであり、とくに紙芝居の制作を進めていく際に表出した依頼者とその家族の思い、多様な専門性をもつ教員らの気づきや学びに焦点化し、今後、子育て支援活動の一形式として紙芝居制作に取り組む場合に配慮すべき事項について検討した。

紙芝居は、ことばと絵が一体となって、観客である多くの人々の間に理解と共感を生み出すメディアであり、本プロジェクトではその特性を存分に生かせるように配慮をして紙芝居制作にあたった。とくに脚本作成や作画の際には、想定される観客に最も伝えたいメッセージに焦点を当てることによって、ことばと絵を削ぎ落していったが、この工程における対話が多様な観客をいきいきとイメージすることに繋がったといえる。

また紙芝居の制作過程を通して、1) 時間を区切ることが生む駆動力と具体物のもつ力、2) 対話を促すツールとしての紙芝居制作の可能性、3) 漠然とした不安を絵と言葉で表現することの意味、仲間とともに考えていくことの重要性、の3点が析出された。

キーワード：紙芝居制作，子育て支援，聴覚障害理解，多文化共生，幼保小接続

